

「田中正造」がキーワードになる時代

今、なぜ「田中正造」か。100年以上前に、原発事故を予見していた？

田中正造が没して100年目(※)である。

一世紀の年月が経ち、田中正造はこれまでとは異なった風貌を持って甦りつつあるように思える。

昨年3月11日、東日本大震災が起こり、東京電力福島第二原子力発電所の爆発事故が発生した。この事故が田中正造のこれまでの評価を変えた。日本の公営の原点である足尾銅山鉛毒事件と闘った人というだけでなく、近代文明を大きな視点で見据えた思想家としての田中正造が捉えられてきたのである。

かつて人類が体験したことのない「想定外」の原発事故は世界中に大きな衝撃を与えた。これまでの多くの人は、人間が科学技術の力を利用すれば自然をコントロールできる、これを文明と考えてきた。それがこの事故により根柢から覆った。自然をコントロールできると思いこんでいるのは人類の奢りである。

田中正造は「真の文明は 山を荒さず 川を荒さず 村を破らず 人を殺さざるべし」と言った。

今私たちは、田中正造のいう「真の文明」と向きあつて、これからの日本を考えなければならぬ。

※1913年9月4日没

坂原辰男

写真は8月上旬の瀬島湖遊水地



【田中正造】
天保12年(1841)に安蘇郡小中村(現・栃木県佐野市小中町)に生まれた田中正造は、明治時代の政治家で、足尾銅山から流出する鉛毒事件を追及し、大正2年(1913)に亡くなるまで鉛毒問題の解決に一生涯を捧げた。人権擁護と自然保護の先駆者としても知られている。
(佐野市郷土博物館資料より)



足尾に木を植える人たち(後方は足尾銅山精錬所)

辛酸亦入佳境

谷中村村民はどん底の中で国や古河鉱業と闘いつつ、毎日の生活の糧を得ながら生きています。その中で大洪水に襲われ仮小屋が流される。このような状態を詠んだもの。

にくまる、ぼどハ沢山にくまれよ
よくにくまる、人ぞ人のなる

憎まれれば憎まれるほど、人間として生きる自信が湧いてくる。谷中村村民を励まして明治政府と闘う覚悟ができる。

真人無為而多事

まことの人は、さりげなく世の不正を見逃さず、さりげなくそして敢然と闘っていて、そして大変性しい。

真の文明ハ 山を荒さず 川を荒さず
村を破らず 人を殺さざるべし

足尾銅山の繁栄は、渡良瀬川流域を死の川とし、村の自治を破壊し、鉱毒により田畑を荒らし、人の命をも奪つ。これは本当の文明ではない。

現代あらためて嘯み締める 田中正造からの 伝言

解説 / 坂原辰男

水を清めざれば止まず
水を清めて毒に殺さるゝな

埼玉県のリ島・川辺村の遊水地化に対する反対運動を指導した時、納税拒否と徴兵拒否の決議をして大運動に展開した。その時、警告した言葉。

民を殺すは国家を殺すなり
法を蔑にするは国家を蔑にするなり

1900年(明治33年2月17日)の亡国演説より。4日前に川俣で起こった鉱毒の被害民への暴行に対する正造の怒りの演説の一部。明治政府が被害民を国民とは思わず弾圧し、法律を無視して被害民を苦しめている。これはすでに国家ではないという川俣事件への抗議である。

デンキ開ケテ世見暗夜となれり

社会が物質的な発展のみを追い求めていたら、人間社会は暗黒になってしまう。天然自然のエネルギーを活用し精神的な発展を先行していく文明を追究していくべきである。

天の監督を仰がざれば凡人墮落。
国民、監督を怠れば、治者盗を為す

政治家が、正義とか道徳があることを忘れて政治を行えば、民衆は本質を失い墮落する。そうさせないために国民は、政治家を絶えず監視しなければならない。また、その監視を怠れば政治家は国民を騙し、盗みをすすめるといものである。

少しだも人のいのちに害ありて
少しくらいハハよいというなよ

鉱毒に汚染された米や麦を知らずに食べている様を毒食というが、少しくらいだから食べても良いという理由にはならない。少しくらいが溜まり溜まって大きな害になる。今という放射能の溜まり方とも似ている。

水は自由により高きより低きに行かんのみ
水は法律理屈の下に屈服せぬ

正造の治水観。水は自然の理に則して流れる。だから高い所から低い所に流れる。たとえ国会で決めても法理屈威信と威張っても、水の流れるは法律に左右されるものではない。

何事もあきれてものふ(を)云わぬとも
云わねばならぬ今のありさま

栃木県・明治政府のやっていることは呆れるばかりだが、それもしてられない。何か云って応えなければならぬ。

戦ハ悪事なりけり 世をなべて
むかしの夢とささどれ我人

正造は谷中村問題に専念するため、谷中村民となります。その頃、世間は日露戦争の戦況に沸き立っています。そんな戦争は無駄な事だ、止めてしまえと正造は訴えています。

田中正造という人

文／坂原眞男

政治家田中正造

田中正造は、国会議員の日当と手当を増額する案が審議された時増額に真つ向から反対。その後山県内閣の時、議員歳費を一挙に二ら倍に増額する案が出た際には、反対演説を行った。

「議員の資格や品位は歳費の多少によって決まるものではない。『不義の歳費』を受けるよりは、むしろ『乞食』をして議員の資格、品位を傷つける方が良い」と田中正造は述べている。そして、1901年10月、「直訴」をするため議員を辞めた。

今日の政治家に田中正造の爪の垢でも煎じて飲んで欲しいというのは、田中正造が私利私欲に拘らず正義感に溢れた政治家だったというところからくるものである。そのような政治家が、今の国会議員にいないことは本当に寂しいことである。

田中正造と足尾銅山鉛毒事件

「テニキ開ケテ世見暗夜となれり」とこの言葉が昨年3・11以降の田中正造の思想を代表する言葉になった。田中正造が1913年7月(死の直前)に足利市の友人宅に寄留した時、詠んだ言葉である。いくら文明開化として街に電気がついて夜空が明るくなっても鉛毒によって人間の命が失われるならそれは、もはや文明ではない。

120数年前の渡良瀬川の鉛毒被害地はまさにそのような日本最初の公害、公害の原点の地域で川の魚を死滅させ、作物が立ち枯れ、農作物への被害が大規模に現れた。特に1896年9月の大洪水は栃木・群馬・埼玉・茨城・千葉・東京の136町村に被害を及ぼし、被害農地の面積は4万6000ヘクタールになると言われている。

また、農民の体にも影響を及ぼすようになってきた。栄養失調に陥り、健康を侵される人が多く出た。

調査によると、死産や乳幼児の死亡率が全国平均や鉛毒被害を受けていない地域より高いことが明らかにされている。当時の医学では重金属と健康障害との関係がわかっていなかったため、健康被害の深刻さを正確には把握する事ができなかった。

田中正造は、日本で初めて起こった公害足尾銅山鉛毒事件と真正面から闘った人である。1891年12月、衆議院で鉛毒問題について政府の姿勢を初めて追及した。明治政府は1897年足尾銅山鉛毒調査委員会を設置し対策を立てるが、農民の銅山の操業停止という要求は認めることができなかった。

一方で1900年、鉛毒被害農民は第4回「押し出し」(大善請願行動)に出るが、群馬県の川俣に於いて警官隊によって阻止され、実力で解散させられる「川俣事件」が起こった。その後正造は議員を辞職し、明治天皇に直訴をする。

明治政府は鉛毒問題を治水問題にすり替え洪水予防の目的で遊水池を造る計画を立て、谷中村を候補にあげる。それに対して正造は谷中村に住みつき最後まで抵抗するが、1907年谷中村は土地収用法が適用され、強制破壊が行われた。

足尾銅山鉛毒事件は日本で初めての凄ましい鉛毒被害の歴史であり、被害農民が、政府と銅山を経営する古河資本と闘った運動の歴史である。いわば被害民が「政府の鉛毒垂れ流し」を認めず、生活改善要求の運動を起こした最初の住民運動である。

その中で田中正造は被害農民・住民と一緒に闘い、行動を共にした政治家であり、思想家であった。

福島原発事故との共通点は、どちらも国策を貫いた結果起きた事故で、「本質的なことは隠蔽する」という、100年前と同じような政府の対策が目立つ処にある。

田中正造

年譜

(年齢は数え年。参考資料は佐野恒三博士著「田中正造」)

- 天保12年(1841)1歳 ▶ 11月3日、下野の国安蘇郡小中村(現・栃木県佐野市小中町)に生まれる。名主富蔵の長男。
- 安政6年(1859)19歳 ▶ 小中村 六角家領の名主に公出される。
- 文久3年(1863)23歳 ▶ 大沢カツと結婚
- 明治元年(1868)28歳 ▶ 六角家改革事件により入獄約8か月。
- 明治3年(1870)30歳 ▶ 江刺県現・秋田県と岩手県の一部花輪分局の役人となる。
- 明治4年(1871)31歳 ▶ 上役暗殺の疑いを受け投獄される。獄中西園立憲編者政治経済の本を読む。入獄2年9か月。
- 明治7年(1874)34歳 ▶ 疑いがはれ、小中村に帰り商売と勉学に励む。
- 明治11年(1878)38歳 ▶ 栃木県第四大区三小小区区議員に選ばれる。
- 明治13年(1880)40歳 ▶ 栃木県議員に当選。以降4回連続当選。有志とともに国会開設運動に尽くす。
- 明治17年(1884)44歳 ▶ 栃木県令三島運圃(なむらむの庄政)に反対、加波山(かばさん)事件に関係したとして入獄3か月。
- 明治19年(1886)46歳 ▶ 栃木県令議長となる。
- 明治23年(1890)50歳 ▶ 第1回衆議院議員選挙に当選。以降6回連続当選。
- 明治24年(1891)51歳 ▶ 第2回帝國議会はじめて「足尾鉛毒の儀につき質問書を出す。
- 明治29年(1896)56歳 ▶ 渡良瀬川大洪水。鉛毒水が広がり被害民大会が開かれる。被害民とともに足尾銅山鉛毒停止運動を開始。議会で鉛毒事件について、繰り返し政府に質問する。
- 明治32年(1899)59歳 ▶ 議員歳費値上げ案反対演説をし、歳費を辞退。
- 明治33年(1900)60歳 ▶ 被害民第4回大善請願の途中、川俣事件が起きる。
- 明治34年(1901)61歳 ▶ 衆議院議員を辞職し、鉛毒事件を天皇に直訴。
- 明治35年(1902)62歳 ▶ 川俣事件裁判での官吏侮辱罪で入獄41日。獄中で聖書を読む。この頃、渡良瀬川下流の川辺・利島村(埼玉県)や谷中村(栃木県)を遊水池にする計画が起きる。
- 明治37年(1904)64歳 ▶ 谷中村に住む。遊水池反対運動に励む。
- 明治39年(1906)66歳 ▶ 新紀元社の例会その他で谷中村事件を語る。谷中村の名前が消され、藤岡町の一部にされる。
- 明治40年(1907)67歳 ▶ 谷中村残留民家強制破壊。谷中村復活運動に活躍。
- 明治42年(1909)69歳 ▶ 「政憲破壊に関する質問書」を書き、友人島田三郎議員らら名前を衆議院に出す。
- 明治43年(1910)70歳 ▶ 関東大洪水。政府の治水政策を正すため関東各地の河川を実地に調べる。
- 大正2年(1913)73歳 ▶ 8月2日、河川調査から谷中村への帰途病に倒れ、9月4日死去。遺骨は6か所に分骨し埋葬。

田中正造を支えた 人々

原田定助

足利

慶応3年(1867)4月足利本町生まれ。父は資産家であり綿糸商であった原田礎三郎。母は田中正造の妹りである。定助は伯父田中正造の関係で早くから島田三郎・木下尚江・内村鑑三らと交際があり、キリスト教的な精神運動に参加していた。また定助は明治29年、足利友愛議団において鉱毒被害者の救済活動や公娼廃止運動を積極的に行った。

田中正造の隠れた経済的支援者で、正造が国会議員を辞任した明治34年から定助が糸相場で失敗した39年までの5年間、毎月1000円の金を正造に送り続けたと言われている。

長祐之

足利

長祐之が明治24年(1891)に発行した小冊子「足尾銅山鉱毒渡良瀬川治屋事情」は、鉱毒事件の初期の運動を記録した貴重な史料である。

長の足尾鉱毒事件への関心は明治23年の大洪水の頃であった。鉱毒地の実地調査をしながら活動方針を検討し、23年には渡良瀬川流水の実地調査を開始し、翌24年には足尾銅山の視察をした。当時の足尾町長は長真五郎で祐之の本家筋にあたる。その時鉱業所幹部と面会、これらの経過を記録したのが冒頭に紹介した本である。

その後、長は国会議員、足利町長を務めた。

室田忠七

足利

足利に於ける鉱毒運動の中核となる働きをした重要な人物。

明治3年12月に久野村大字野田に生まれる。久野村は鉱毒被害の激甚地であった。また、足利は田中正造と対立する木村半兵衛(第4代)の勢力が強かったが久野村の場合は、田中派の地盤であった。

忠七は28歳で第1回「押し出し」(鉱毒被害民大上京請願行動)に参加して以来、田中正造らと行動を共にし、常に鉱毒運動のリーダーであった。

忠七が明治30年3月2日から記録し始めた「鉱毒事件日誌」(全10冊)は、35年12月まで行動を記載され、鉱毒運動の全体像を読みとることができる。中でも明治33年2月13日に起きた「川俣事件」の記述は貴重な運動の記録である。この事件により世論は再び鉱毒問題に目を向け大きな社会問題となった。

須永金三郎

足利

慶応2年(1866)10月通3丁目に生まれる。明治18年頃から渡良瀬川の鉱毒被害が表面化して長祐之と共に「足尾銅山鉱毒渡良瀬川治屋事情」を出版。田中正造とも接触を持ち、明治23年には「西毛新報」を発行し、鉱毒問題と取り組む。明治31年には「鉱毒論稿第1編 渡良瀬川」を刊行した。川俣事件の前年の明治32年10月には、鉱毒議会在渡良瀬川沿岸各町村で結成され、鉱毒運動の中核となった。

明治34年12月、足利町に足尾鉱毒救済会が設立し、足利友愛議団とともに、鉱毒被害者への救済活動を行う。

足利・佐野編

川俣久平

佐野

1847年(弘化4)~1917年(大正6)、佐野市田沼町栃本生まれ。36歳で国会議員。田中正造とともに立憲改進党に入党し、国会開設運動に関わる。

明治23年の第1回衆議院議員選挙では、田中正造を応援し選挙の参謀的役割を担う。

正造が国会議員になっても田中正造と共に足尾銅山鉱毒事件の被害者への救援運動に参加、物心両面から田中正造を支援する。

蓼沼文吉 (四代目)

佐野

1862年(文久2)~1919年(大正8)、佐野市田沼町岩崎生れ。佐野鉄道社長、衆議院議員。二代目文吉の二男として生まれ、1886年、兄の死により家督を継ぐ。

1901年10月田中正造が衆議院議員を辞すと、その地盤を継承して代議士となる。

1910年には資産の一部で蓼沼慈善会(のちの三好園)を設立し、青少年の育成・貧民救済などの救済事業を行う。文吉は幼年期から田中正造より愛撫を受け、政治指導を蒙り、後継者として代議士となる。田中正造の政治資金は文吉の私財から献ぜられたものが多いと言われている。

栗原彦三郎

佐野

1879年(明治12)~1954年(昭和29)、佐野市閑馬町生まれ。幼少より田中正造からの知遇を受け、後継者を自認。正造没後「義人全集」を編纂する。

明治29年津田仙を案内して鉱毒被害地を視察、東京で鉱毒救済のための演説会を組織するなど、鉱毒問題の解決のため尽力した。

東京市赤坂区会議員、東京市会議員を経て1928年(昭和3)、第1回選挙に民政党に属して栃木県第2区から立候補して当選。

もの言わぬヨシ原に恥じない行動を!



鈴木俊美 栃木市長

の存続をかけ奔走した場所であった。正造翁は、今回、渡良瀬遊水地がラムサール条約の湿地に登録されるのをどう受け止めているだろうか。

現栃木市長として私は、地元住民をはじめ関係者の様々な意見を聞いた。そして、治水を条件に登録に賛意を示した。

限られた時間の中でこの一連の対応は最善のものであったと確信している。しかしより重要なのは、これからの取り組みである。特に治水と環境保全の両立である。その為にはあらゆる関係者の連携が最も大切である。

もの言わぬヨシ原に恥じない行動をとってまいりたい。

広大な渡良瀬遊水地のヨシ原は美しい。しかし、そこは百年前、田中正造翁が農民と共に谷中村

私たちの将来の姿を考える機会



岡部正英 佐野市長

「正造翁の偉業を広め、永く後世に伝えるため、郷士の偉人である正造翁を身近に感じていただけるよう、市議会議員、関係団体の代表にも参画いただき実行委員会を組織し、様々な顕彰事業の準備をしております。渡良瀬川下流域の人々を救うため、真に命をかけて行動した正造翁の軌跡を改めて見つめ直す良い機会です。正造翁の思いを羨望していただくためにも、私たちの将来の姿を考えるためにも、多くの皆様の顕彰事業へのご参加をお願いいたします。」

佐野市では、田中正造翁の生誕の地、終焉の地として、「田中正造翁没後百年顕彰事業」に取り組んでおります。

関係自治体首長からのメッセージ

「田中正造翁没後100年を迎えて」

100年後、200年後に引き継ぐために



清水聖義 太田市長

「原発事故を検証する国会事故調査委員会から原発事故は「人災である」と報告がありました。まろつくりの一番のテーマは市民が安心して住める場所、安心して帰れるふるさとをつくることだと思います。田中正造翁の行動の原点もそこにあつたのではないのでしょうか。

翁が唱えた治山治水は後世へ引き継がれ、渡良瀬川の豊かな恵みは、今日の太田市の発展の源になりました。100年前の先人から引き継いだ渡良瀬川の水を100年後200年後の世代に引き継げるよう人と自然環境と産業が調和したふるさと太田を築いてまいりたいと田中正造翁没後100年に際し、改めて思います。」

今年田中正造翁没後100年を迎えたことは、たいへん意味のあることだと感じています。先ごろ、福島第

真剣に考えなければならぬ重大な時期



安楽岡一雄 館林市長

は、田中正造翁の思想・遺徳それに功績を後世の人々に正しく伝え残すためだ。今、人類は地球の温暖化や、経験したことのない自然災害に悩んでおり、真剣に考えねばならぬ重大な時期に立たされている。

翁は、「真の文明は山を荒さず、川を荒さず、村を破らさず、人を殺さざるべし」という言葉を残している。全生涯を公害闘争に捧げた先駆者によさわしい記念館を造りたいと思っている。

NPO法人が運営する「足尾鉱毒事件田中正造記念館」を「歴史の小径」の一角に移転させる予定だ。これ

その存在、行動、思想等を広く顕彰する



栗原実 板倉町長

前、明治45年6月の日記に綴った言葉です。

月日は流れ、「21世紀は環境の時代」と言われて久しく、環境問題が国際社会においても最重要課題とされている中、本年7月、翁ゆかりの地である渡良瀬遊水地が国際的に重要な湿地を保全するラムサール条約に登録されました。時代は変われど、翁の言葉は色あせることなく、現代社会においても強く訴える力を持っていると思います。

没後100年を迎えるにあたり、改めて環境問題を考えてとき、先駆者である翁の存在、行動、思想等を広く顕彰することは、大変意義深いものと思います。

「真の文明ハ山を荒らさず川を荒らさず村を破らさず人を殺さざるべし」は、田中正造翁が、今から100年

田中正造没後100年と福島原発事故



大豆生田実 足利市長

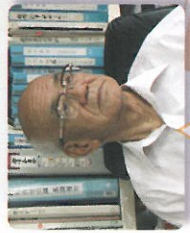
食べた流域住民に死者がでる大災害となりました。田中正造翁は、この事件で代議士として帝国議会に質問書を提出し、被災者の救済に奔走しました。

さて、昨年の福島第二原子力発電所の事故による放射性物質汚染は、多数の住民の生活と産業に甚大な被害をもたらしました。今、翁が健在なら真相究明と被災者の救済に懸命に動いたのではないのでしょうか。

翁の没後100年の節目に、改めて環境問題と翁の偉業に理解を深めたいものです。

渡良瀬川は、明治中期に足尾鉱毒事件により再三汚染され、魚は大量に死に、田畑は地力を失い、魚や作物を

田中正造を語る 現代の人々



渡良瀬川鉱毒根絶太田期成同盟会
板橋明治さん (太田市只上町)

足尾(渡良瀬川)の鉱毒は今も続いている

渡良瀬川(足尾)の鉱毒に苦しめられたのは佐野や谷中村だけではなく、上流の足利や太田だって大変な被害を被っている。特に毛里田村(現太田市)の惨状は「第二の谷中になっていったかもしれない」と板橋さんは言う。戦後間もなく、鉱毒根絶を期して同盟会を組織し、91歳になる現在も鉱毒根絶を訴え続けている板橋さんは、カクシヤクとして、不勉強な我われを一喝してくれる。

「せめて関連本の1冊や2冊、読んでからこい!」

60年以上も古河鉱業(足尾銅山)や国と闘ってきた姿には、身震いするほどの貫禄と威厳を感じる。

「つまりは田中正造は善人だった。結局、谷中は廃村になってしまっ、彼の行動、運動も苦勞も実らなかつたんです」

「でも子どもたちのころから、祖父には『乃木大将か田中正造のようになれ』といわれて育ってきたんだ」

戦後の板橋さんと古河の闘いは、地区の汚染農地360%の土壌を20年かけて入れ替えただけ、補償金15.5億円を取得し、毛里田地区の農家の救済に充てたことなどであった。

板橋さんはいう。「今も鉱毒は続いている。あそこ(足尾)を見てみると、足尾には今もって、危険な鉱さいを沈殿させる堆積場がいくつもあるのだ。『古河があるかぎり、渡良瀬の鉱毒は続く』のである。」



右写真は毛里田小学校裏にある「祈念鉱毒根絶碑」。土の字をかたどっている。



関塚知子さん

田中正造は未来を予言していたかのよう。自然を無視し便利を優先した結果、大変なことが起こる。人は同じことを繰り返さずに学ばなければなりません。有機農業を営む私は土や水、暮らしの大切さを改めて考えます。



佐野高付属中学校1年 齋田智裕くん

僕は学校の授業で学び、足尾へ植樹にも行ききました。正造は思いやりがあり、正義感の強い人だと思います。結婚しても、一緒に過ごす時間が少なかった夫婦。奥さんも偉いと思いました。



真鍋由希子さん

今の時代、経済が優先されることが多く、人の命・自然環境は二の次になっている感じがします。田中正造のように人民を大切に思い、『心』で動く政治家が今こそ必要なのではないでしょうか。



田中正造大学事務局長
坂原辰男さん (佐野市小中町)

田中正造情報の発信基地

田中正造大学は1986年に開校した、田中正造を学ぶ市民団体である。活動の場は栃木県佐野市小中町にある田中正造生家周辺。

当初は、生誕地の地元の人たちが中心になり、寺子屋風の学び舎を開校する予定だったが、最初の講座で宇井純氏が教壇に立つというPR記事が新聞に掲載されると申し込みが殺到。開講式には全国各地から300人余りが参加してくれた。

その後は1年に定期講座を3回、2月に総会と特別企画を開催。渡良瀬川研究会の春のフィールドワークや夏のシンポジウムの開催に対して協力参加。また、全国各地から依頼される渡良瀬川の上流から下流までの鉱毒被害地の案内や田中正造ゆかりの場所のガイドを行う。

因みに田中正造大学の教壇に立った教授の数はこの26年間で90人を数えるが、常に田中正造の視点で現代を見ようと、環境問題を題材にした定期講座を多く実施している。

また、田中正造に関する各種事業に際しては、田中正造大学が中心になって実行委員会を結成することも多く、地元を中心に全国各地への(田中正造の)情報発信基地の役目を果たしている。

来年没後100年記念に際して、実施の予定の「田中正造・未来への大行進」などを含めた各種イベントは田中正造を改めて全国へ発信していく良い機会である。



足尾鉱毒事件田中正造記念館 名誉館長
渡良瀬川研究会 顧問(前代表幹事)
ふかひな ざとる
布川 了さん (館林市尾曳町)

基本思想は21世紀へのメッセージ

教員時代に郷土史を教えたことと水保病の患者さんを目の当たりにしたことをきっかけに『田中正造』に没頭しました。以来約50年、田中正造及び足尾鉱毒事件の研究を続け、その思想と運動の普及と啓蒙に努めています。

田中正造の基本思想は21世紀へのメッセージだと思っています。遺された言葉の多くは、現在の状況に照らし合わせても決して色褪せることなく、政治の浄化や環境問題などにピッタリと当てはまるんです。現状を打開する強いメッセージだと思っています。

現在は、記念館の各種事業に関わっています。また、毎年開催されるシンポジウム、研究誌(2~3年に1回)・会報(季刊)の発行、研究会や講演会、研究交流などが研究会の主な事業内容です。



佐野市郷土博物館
(佐野市大橋町/☎0283-22-5111)
田中正造特別展示室には田中正造の遺品や関連資料が多数展示されている。



庭田清四郎宅(佐野市下羽田町)
田中正造終焉の地。1913年9月4日、73歳だった。



足尾銅毒事件田中正造記念館
(館林市足羽町/☎0276-75-8000)
田中正造を顕彰し、足尾銅毒事件に関する資料を集めた記念館。東武佐野線渡瀬(わたらぎ)駅北側にあるが、今後旧市街地に移転予定。



田中正造翁遺徳之資碑(古河市西町)
旧古河藩の谷中村ということで、田中正造の支援者も多かった古河市。渡良瀬遊水地の東端の土手に建てられた碑(古河コルブリングス・クラブハウス前)。



川俣事件記念碑
(群馬県明和町・昭和橋東町)
足尾銅毒問題の中で、最も大きな事件といわれる川俣事件。1900年2月13日、足尾銅山の鉱業停止を求めて上京請願を決定しよつとしたが、佐貫村大佐貫(現群馬県明和町)の利根川手前まで警備隊と衝突、多くの犠牲者を出して阻止され、数百名が逮捕される。その後参議院議員だった田中正造は議員を辞職し、天皇に謝罪問題を直訴した。



霧籠寺(足利市野田町)
1913年9月6日、田中正造の密葬が執り行われた寺。足尾銅山鉱業停止請願事務所が置かれていたそう。



惣宗寺(佐野市・佐野回除け大跡)
1913年10月12日、田中正造の本葬が行われた寺。当日は数万人の人が参観に訪れたという。

田中正造の足跡を歩こう

知ろう



渡良瀬遊水地
足尾銅山から流れ出た鉱毒を沈黙させることを目的に、渡良瀬川(湖)の下游域につくられた人工の池(湖)と広大な湿地帯で広さは3300ヘクタール。



旧谷中村遺跡
旧古河藩によって開墾が進められた肥沃な土地で、平和な村だった谷中村。明治18年ごろから足尾銅山から流出される鉱毒により、渡良瀬川が汚染。一帯が死の沼となる。明治39年、藤岡町に合併。387戸2500人の村は廃村となった。



浄蓮寺(佐野市小中町)
田中家の菩提寺。正造の墓所は浄蓮寺南の生家前(通称の反対側)にある。毎年9月1日に正造とカサリ夫人の法要が営まれている。



田中正造生家
(佐野市小中町/☎0283-24-5130)
表門の右側に隠居所、奥に母屋と土蔵がある。栃木県の指定史跡(田中正造旧宅)になっている。



田中霊祠(栃木市藤岡町)
旧谷中村に田中霊祠として建てられたが、渡良瀬川利根川の改修により1916年、現在地へ移る。4月の第1日曜が例祭日。



旧谷中村合同慰霊碑
旧谷中村にあった慰霊地を兼ねた慰霊碑としたもの。1973年に建立。



霧籠寺
(館林市下早川田町)
1913年9月6日、田中正造の密葬が執り行われた寺。足尾銅山鉱業停止請願事務所が置かれていたそう。



浄蓮寺(佐野市小中町)
田中家の菩提寺。正造の墓所は浄蓮寺南の生家前(通称の反対側)にある。毎年9月1日に正造とカサリ夫人の法要が営まれている。



利根川小学校(埼玉県須賀川市立利根川小学校)
正造のおかげで遊水地化から守られた(埼玉県川辺、利根川両村民が正造の業績を讃え、分骨埋葬した)。



田中霊祠(栃木市藤岡町)
旧谷中村に田中霊祠として建てられたが、渡良瀬川利根川の改修により1916年、現在地へ移る。4月の第1日曜が例祭日。



田中霊祠(栃木市藤岡町)
旧谷中村に田中霊祠として建てられたが、渡良瀬川利根川の改修により1916年、現在地へ移る。4月の第1日曜が例祭日。



浄蓮寺(佐野市小中町)
田中家の菩提寺。正造の墓所は浄蓮寺南の生家前(通称の反対側)にある。毎年9月1日に正造とカサリ夫人の法要が営まれている。



田中正造と利根・渡良瀬の流
それそれの東流・東遷史
布川 了 著
従来、「治水」の観点から多く説かれてきた利根川東遷史を、縄文海進の時代に合わせて「利水」の視点からとらえ直した力作。
四六判/232頁/1,890円



谷中村長 茂呂近助
未簡たちの足尾鉍毒事件
田中正造とともに足尾鉍毒事件を戦い、廢村の谷中村をあとに北海道サロママへ移住。茂呂近助の戦いの軌跡を未簡たちがたどる検証の記録。
四六判/288頁/1,890円



公書の原点を後世に 入門・足尾鉍毒事件
広瀬 武喜 著
現代に続く足尾鉍毒事件の全体と、田中正造の思想を学ぶための入門書。地域の歴史を市民自らが創ってこつとす力強い意志が込められている。
四六判/208頁/1,575円



救現 田中正造と足尾鉍毒事件研究 15号
田中正造大学出版部【発行】
特集は「正造思想の「根」を探る」、安在邦夫「自由民権運動と田中正造」、赤上剛「日清戦争前後の田中正造の行動と思想」などを掲載。
A5判/92頁/1,050円



田中正造と足尾鉍毒事件研究 15号
渡良瀬川研究会【編】
布川了、田中正造と吉田東伍の交話—利根川の南遷をめぐる—、牧原薫夫「はめぐい」の場としての谷中村、林彰「初期社会主義者たちと田中正造」など、7論文を収録。
A5判/128頁/1,365円



田中正造物語
下野新聞社【編】
60回に及ぶ長期連載完結。つねに民衆とともに闘った田中正造の生涯に、2009年12月に急逝した若林治美（はるみ）記者が語る。
四六判/200頁/1,890円



岸辺に生う
水樹涼子 著
一人間・田中正造の生と死—苦しみ悩みながら生きる人間・正造の生涯に迫る。百年前に叫ばれた人権・平和・環境の思想が現代に…。没後100年記念出版。
四六判/200頁/1,575円



谷中村 足尾鉍毒事件の100年
堀和也・母日新聞社宇都宮支局【編】
足尾から渡良瀬川流域、さらに北海道へ、アリのヒンヤ、鉍毒事件を再検証する意欲的連載が完結。嶋田早苗、菅井益郎、布川了氏の特別寄稿を収録。
四六判/288頁/1,890円



渡良瀬 100年 自然・歴史・文化を歩く
読売新聞社宇都宮支局【編】
足尾鉍毒事件により谷中村が廢村となつて100年。きょうも広大な中原を風が渡る。二年に及ぶ精力的な新聞連載で、渡良瀬遊水地のいまを歩く。養老孟司氏の特別寄稿を掲載。
A5判/192頁/1,890円



田中正造と天皇直訴事件
布川 了 著
天皇直訴は「義人正造」の個人ブレーではない。正造の鮮い生涯の中で頂点となる天皇直訴—100年後の今、その全貌を解き明かす。
四六判/176頁/1,575円

「地元から発信する 足尾鉍毒関連図書案内」

問い合わせは随時 TEL 028-616-6600



[改訂]田中正造と足尾鉍毒事件を歩く
布川 了 著/堀内洋助 写真
足尾から渡良瀬川流域、旧谷中村など田中正造と鉍毒事件に関わる78地点を徹底ガイド。フィールドワークに必要な情報を満載。
A5判/140頁/1,575円



ずいそうしや新書16 増補 田中正造たたかひの蹊跡
布川 了 著
渡良瀬遊水池 原発し—
間、死を前にして、正造は何を想い、何を語つたのか。「問題から言ふ時に八此処も敵地だ」。
新書/160頁/1,050円

渡良瀬遊水地がラムサール条約に登録された

- 水鳥などの生息地として、国際的に重要な湿地や動植物を保全することを目的にした条約で、1971年に制定、1975年に発効された。
この条約がイランのラムサールにおいて作成されたのに因んで、「ラムサール条約」と通称で呼ばれている。
日本では今年7月に9カ所が登録され、全国では46カ所となった。
- 遊水地の総面積は3300%。そのうち2861%が登録された。渡良瀬遊水地の中の大半は本州最大の葦原で、貴重な動植物が多数確認されていて、中には絶滅危惧種も多種含まれているという。

ラムサール条約とは

ラムサール登録について
鈴木俊美 栃木市長

渡良瀬遊水地は、かつて多くの人々の悲しみを伴い、治水を目的に人工的に作り出されたものである。その人工的に作りだされた遊水地が世界に誇れる自然豊かな湿地になったことはフィスコースの見本ではないかと思う。今回、国際的に重要な湿地と位置付けられたことにより、遊水地は自然保護と治水という2つの役割を担うこととなった。
そこで今後我々は、地元住民をはじめ関係機関や関係団体と連携し、この2つの役割の両立をめざし継続的に取り組んでいく責任があると受け止めている。
また、この登録を機に、渡良瀬遊水地の魅力を活かし、地域の活性化や観光振興にも取り組んでいきたいと考えている。

田中正造没後100年記念行事

2012年秋から2013年秋まで。

- 第40回 渡良瀬川鉍毒シンポジウム
「谷中村民を支えた街・古河で考える—田中正造・長塚即谷中村—」
渡良瀬遊水池 原発し—
・8月26日(日)0時半—
・会場：古河福祉の森会館
・主催：渡良瀬川研究会
- アーティスト田中正造—講演会とライブ—
・講演：「正造さんと原子力」講師：小出 浩二
・田中正造入門講座・展示会・有機農業 物即売会
・会場：佐野市文化会館
・9月29日(土)10時—18時
・主催：田中正造没後100年記念事業を推進する会
- まんが田中正造 発行 下野新聞社出版
・2012年9月発行
- まんが発行記念シンポジウム(仮)
・10月28日(日)13時—
・場所：佐野市文化会館大ホール
・内容(案)：コーディネーターとパネラー によるディスカッション等々。
- 芸能で綴る田中正造—内容は検討中—
・2013年3月予定
- 主催：田中正造没後100年記念事業を推進する会
・問い合わせ：0283-23-2896
- 第41回 渡良瀬川鉍毒シンポジウム
・2013年8月予定
・問い合わせ：0283-23-2896
- 田中正造没後百年記念式典 記念賞授与式
・2013年10月12日(土)
・佐野市文化会館
- 田中正造没後百年記念講演会(仮)
・2013年10月12日(土)13日(日)
・佐野市文化会館
- 田中正造 未来への大行進
・2013年10月13日10時—
・会場：観音寺・佐野市内
・未来を担う子供たちと共に、救済隊や大鏡を叩きながら佐野市内をパレードを行う。
・主催：田中正造没後100年記念事業を推進する会
・問い合わせ：0283-23-2896